

一期一会で済まない業界

会員 北村 菜摘



私は、社会人経験がないまま弁護士になったので、他の業界のことはわからないのだが、この業界に入ってみて思うのは、思っていたよりずっと狭い世界なのだということである。先輩に「この業界、大体は知り合いか知り合いの知り合いだよ」と言われて、特に人付き合いの良い人でもない限りそんなことはないだろう、と軽く考えていたのだが、実際に法曹の世界に触れると、特に人付き合いの良い方でもない私でも、そのとおりだと思うようになった。

なんといっても、実務修習先が三重県だったのだが、早速、検察教官の検事がロースクールで履修していた検察のクラスにおける指導担当の検事とお知り合いという状況である。面談時、まさかそんな話を聞くとはいってなかったため、密かに動揺したものである。

しかも、三重県は県の人口の割に弁護士が少なく、未だに200人もいない。そんな地方なので、修習先の事務所で扱っている事件の相手方代理人が修習生仲間の修習先の弁護士、なんてこともざらにあるし、1年足らずの実務修習でも、刑事事件の法廷にいる裁判官、検察官、弁護人が全員知っている人になってしまうことも珍しくない。何か問題を起こすとすぐに広がりかねないため、なかなか緊張感のある修習だった。

このように狭い世界の修習が終わり、私は、全国展開を進めている事務所の、東京にある本店に勤務することになった。東京には弁護士の約半数がいるというし、事務所が扱う事件も全国から集まっているので、知っている人にはそうそう会わなくなるのだろうかと思っていたのだが、結論としてそんなことは

なかった。

審判や訴訟に出廷するようになってから半年足らずではあるが、裁判所で、別の事務所で勤務している同期の弁護士に1回どころではなく会っている上に、修習中の指導教官にお会いしたこともある。東京弁護士会の行事や研修では、必ずと言っていいほど同期の知り合いに会うし、事務所を退所された先輩にすぐお会いできたこともある。

直接会うこと以外では、初めて電話交渉をした相手方代理人が、津修習の修習生仲間の指導担当だった先生だったということがある。また、後に修習でクラスが一緒だった同期から聞いた話だが、とある事件の相手方代理人がその同期の先輩で、一緒にその事件を担当していたため、修習同期同士で電話交渉をすることになりかけた、ということもあっらしい。

このような状況なので、司法試験に合格してから約2年、弁護士になってから1年足らずの私でも、この業界の狭さを認めざるを得ない。実は、この原稿を書くことになったのも、初めての国選弁護人になった際に接見に行った警察署で、私の次に接見をしたのが、東京弁護士会のクラス別研修の副担任の先生だったことがきっかけである。警察署でお会いしたことがクラス別研修で話題に上がったため、その流れで、67期リレーエッセイの担当を決める際にご指名いただいた、という顛末である。これからの弁護士人生においては、これ以外にも、思わぬところで思わぬ人に出会って思わぬことが起きることもあるのだろうが、それをチャンスに変えられるよう、日々しっかりと業務を行っていききたい。